

主題	養護施設入居者に対するグループワークの活用と、その効果に関する研究		
副題	業務見直しからの時間作り、人材確保への取り組み		
グループワーク			
研究期間	18 ヶ月	事業所	社会福祉法人聖母会聖母ホーム 養護老人ホーム
発表者：當麻 千晶		アドバイザー：松田 ひろ子	
共同研究者：伊藤 波			
電 話	03-3953-4028	メール	Seibohm@m21.alpha-net.ne.jp
FAX	03-3950-4130	URL	http://www.aa.alpha-net.ne.jp/seibohp

今回発表の事業所やサービスの紹介	聖母ホームは大正13年にカトリック婦人会あけの星会が都内大森で、貧しい老人を収容。「マグリット養老院」が当ホームの発端となる。 平成13年養護老人ホームに特別養護老人ホームが併設され150名が暮らす施設となる。 高齢者福祉の拠点として信頼される施設を目指している。
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

現在、養護施設の重度化に伴って介護量の増加という状況に陥っている。自立の入居者からは日中の活動、楽しみを持ちたいという声が聞かれているが今の現状では、職員は日々の介護者のケアがメインとなってしまう、本来の養護施設としてのアプローチが減少している。以前は、自立度の高い入居者が多かった為職員と入居者間のコミュニケーションが密におこなわれていたがADLの低下に伴い交流が減少し職員・入居者間の関わりも偏りがちである。

このような現状を検討した結果、1から業務の見直しを行う事が課題となった。 養護施設として本来のアプローチを考えた際に以前行っていたグループワーク（手作りランチ）を再開する事が検討された。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

- ・ 介護ばかりに偏っていた業務を要介護者・自立者に囚われることなくどちらの立場の入居者でも参加できるグループワークを行う事によってグループ内の意識を高める。
- ・ 担当職員がグループをまとめる事によって達成感や新しい気付きを得て、今後のより良いケアの向上を目指す。
- ・ 役割を持ってグループワークに参加する事により、「やりがい」「楽しみ」「充実感」を得る事を目指す。⇒「QOLの向上」
- ・ マンネリ化した施設生活の中でグループワークを通して刺激を持ち、認知症の予防に繋げていく。⇒「認知症の予防」

《3. 具体的な取り組みの内容》

① 業務の見直し・時間・人材確保

要介護者のサービスの移行により 5 名いた介助浴利用者を最終的に 1 名まで減らすことにより非常勤職員 1 名体制で行うことが可能となった。介助浴にあてていた常勤一名を確保する事が出来た。また、栄養士の協力を要請し 2 名の人材確保が出来た。

② 実施回数・予算

入居者 50 名

居室担当 10 名を一班とし年 2 回実施

予算は一回 5000 円 年間 50000 円とした。

③ 計画書作成

実施 2 週間前にメニュー・実施日時などの情報をポスターにて告知し参加者の把握を行う。

食材の発注は、職員の負担軽減の為買い物代行サービスを利用。

④ 役割分担・実施

メンバー 10 名の役割分担を予め担当職員で決定し、担当職員は流れを把握しておく。

⑤ 入居者アンケート・報告書作成

《4. 取り組みの結果と考察》

① 参加者

第一回(サンドウィッチ)

50 名中 44 名参加

第二回(海苔巻き)

50 名中 44 名参加

第三回(たらこスパゲッティ)

50 名中 35 名

② 入居者評価(アンケートより)

- ・入居して以来、キッチンにまた立つことが出来るとは考えてもいなかった。
- ・要介護者との交流が持てたので良かった。
- ・包丁を持つのは久々で上手く使えなかった。
- ・職員と普段接する機会が少なかったのがこうした機会は嬉しい。
- ・メンバー内でトラブルが起き不愉快な思いをした。

《5. まとめ、結論》

介護ばかりに時間を割かれていた職員が入居者との関わりが増えたことにより新しい気付きを得て、ケアプランにも反映する事が出来た。

職員も回を追うごとに入居者との繋がりをさらに意識し円滑な作業を実施する事が出来、リーダーシップの向上に繋がった。

実施回数、頻度としてはまだまだ少ない為、認知症の予防 QOL の向上には至っていない。

しかし、今後もこういった環境を提供できるよう施設全体で継続して取り組んでいく必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

ジゼラコノブカ(1967 年)ソーシャルグループワーク援助の過程 全国社会福祉協議会

萬代隆(2010 年)QOL 学を志す人のために 丸善プラネット株式会社

おはよう 21 2013 年 1 月号 中央法規

《8. 提案と発信》

初回の取り組みは好評でほぼ全員参加となった。

食事中の会話も弾み充実感や達成感があった。

しかし、三回目の取り組みではグループによって参加者が減ることがあった。養護施設でのグループワークは様々な状況の入居者が協力・協調して取り組まなければならないが「足手まといになるから。」「皆と一緒にはおっくうだ。」等の不快な感情の研究・対処の研究等が必要と思われる。

【メモ欄】